

〔翻 訳〕

『スペクテーター』(36)

——第337号から第344号——

門 田 俊 夫

第337号 1712年3月27日（木曜日）

【バジエル】

騎手は若い華奢な馬を調教する。静かな声でもって
コースに出られるように仕込むのだ。（ホラティウス）¹⁾

この度、すでに教育論について2度にわたって意見を頂戴したことのある紳士から3通目の手紙を受け取りました²⁾。この方のお考えは極めて正当なものであり、かつ、目新しいことのように思えますので、読者のみなさんにお知らせしたいと考えます。

拝啓

本来ならもっと早く教育について、もっと突っ込んだ小生の考えをお伝えできていたのですが、思わぬ用事が入ってしまい今になってしまいました。小生が、過日の手紙で、個人教育および公教育のそれぞれの長所をお伝えしたことを覚えて頂いているものと推察します。私たちの最大の関心事である美德を身につけるには、一般に前者の個人教育の方がより効果的ではあることは認めますが、全体としては小生はおそらく後者の公教育に軍配をあげることになります。

そこで、今回の手紙では、子供たちが、学問もさることながら、美德を身につける方法を提案したいと思います。

大半の公教育では、悪徳が露見した場合には即刻、処罰しそれを思いとどまらせるようにしていることは承知しています。だが、同時に、物事に対する正しい判断力を見につけさせる、そして、美德とはどういうことかきちんと分からせる教育をしない限り、それだけでは十分とは言えません。

このためには、若者たちが著名な人物の伝記を読むときにはいつでも、ただ単に数多くのギリシアやラテンの文章を理解させるだけでは十分ではなく、彼らにそれぞれの言動に対する意見を求め、善ないし悪と判断した理由を述べさせる必要があります。こうするこ

1) ホラティウス『書簡詩』1.2.64-65

2) 第307号、第313号参照。

とによって、若者たちは気づかないうちに勇気、節制、名誉および正義といったことが正しく理解できるようになるのです。

誰を例に挙げるかについては細心の注意を払う必要があります。誰某はいくつかの点で素晴らしいところがあるが、それ以外の点では弱点があり間違っているということを教えずなくてはなりません。この心構えがありませんと、少年は往々にして偉人の栄光に眩惑され、美点と欠点を混同し、欠点までも称賛の目で見てしまいます。

小生は常々、生来寛大で慈悲深いアレクサンダー大王がどうして町の統治者を2輪戦車で引き回すような野蛮な行為をしたのか不思議に思っていました³⁾。一般にこれは彼が抱いていたホメロスに対する愛着のせいだと言われていることを小生は承知していますが、最近、プルタークの文章を読んで、小生の解釈が間違っていなければ、この行為の動機が鮮明になったのです。プルタークによれば、アレクサンダー大王には若かりし頃、リュシマコスという先生がついていたとのこと。この先生は礼節という点では何一つ持ち合わせていませんでしたが、フィリッポスと弟子たちに取り入り、王のフィリッポスをペレウス、王子をアキレウス、自分の事をフォイニクスと名づけて宮廷で第二位の地位を占めていたのです⁴⁾。アレクサンダー大王が、このように賞賛されるだけでなく、アキレウスの役を与えられたことで、残酷さと突飛な行動という点で、アキレウスの真似をすることが輝かしいことだと考えたとしても、何ら不思議ではありません。

こういった考えを更に推し進めるために、小生としては、生徒には、通常課題となる韻文ではなく、週に1、2度、読書で知った人物ないし事物に関する自らの意見を書き留めることを課すべきだと提案したいと考えますが、貴殿のお考えはいかがでしょう。要するに、生徒に、トゥルヌスやアイネイアスの行為について論評させ、どの点が優れていて、どの点が欠点であるかを明らかにさせ、非難すべき行為とか賞賛すべき行為を指摘させ、どの程度申し分なく実行されたか、どの点でどちらが秀でているか、また、劣っているかを論じさせるべきなのです。そうすることで、生徒はどの発言が道徳的であるか気づき、どの程度その人物に同意できるかが分かるのです。この課題をやることで、生徒は何を非難し、何を賞賛したらよいかの判断力がつき、早いうちに倫理性の鍛錬ができるのです。

書物で遭遇するこういった例のつぎに、小生は、ホラティウスがやったように、若者たちには同時代の高潔な人物と不名誉な人物を提示することをお勧めします。ホラティウスによれば、これは自分にある特定の美德を奨励する、あるいは、ある特定の悪徳に嫌悪感を持たせるために、父親がとった方法だということです。ホラティウスは、父親から度を過ぎた暮らしをせずに、遺された財産に満足するようにとの助言があれば、バルルスやアルプスの息子のような惨めな目に会わなく済む、と言います。この二人の惨めな人物の不幸が贅沢と浪費を教えてくれるのです。もし父が放蕩への嫌悪感を吹き込んでくれば、セクタヌスのようにならなくて済み、正当な喜びを享受することで満ち足りるのだ、と彼

3) アレクサンダー大王はガザの支配者を自らの戦車に縛り付けて市中を引き回した。(クルチウス・ルプス『アレクサンドロス大王の歴史』第4巻第6章第29節)

4) プルターク『アレクサンドロス伝』5.5

は言います。最近他人の奥方とベッドにいるところを見つかったトレボニウスほど恥ずべき人物はいないのだ、と彼は言います。この方法の威力を解説するために、ホラティウスは、最初は医者の方から従わない頑迷な患者が、周りの人たちが亡くなったと聞くと、おとなしくなるように、往々にして、若者は、他人に降りかかる悪評を聞くと脅えるのだ、と付け加えます⁵⁾。

「キュロス2世伝」の中に登場するクセノフォンの公正教育は非常に有名です⁶⁾。彼が言うには、ペルシアの子供たちは、他国の子供たちと同様に、学校に行き、最も難しいわざを会得するために、正義と節制という原理の習得に熱心に取り組むとのこと。先生たちは、暴力、ごまかし、中傷、ないし忘恩というテーマで、互いに議論し合っている子供たちの声に耳を傾けることで、1日の大半を過ごし、こういった罪に対する考え方を教えるとのこと。キュロス2世自身が罰せられたコートの短長⁷⁾については、リトルトンでよく知られたことですので割愛します。

アプレイオスが伝えるインドの裸行者たちが弟子の教育で用いた方法は、更に好奇心をそそる注目に値するものです。それはつぎのようなものです。夕食の準備が整うと、食卓に並べる前に、師が弟子ひとりひとりに今日一日の過ごし方を尋ねます。二人の間に入って仲違いを終わらせ、仲直りをさせたと答えるものもいますし、親の指示を履行していたと答えるものもいます。また中には、一人で不慣れなことに没頭していたとか、仲間の助言によって不慣れなことを学んだと答えるものもいます。ところが、たまたま何一つ利するようなことをしなかったものがいると、その人物は直ちにその席から外され、ほかの人たちが夕食を摂っている間、課題を与えられるのです⁸⁾。

こういった子供たちに美德を植え付けるいくつかの方法から、普遍的ないくつかの方法を考え出すことが可能です。小生が植え付けたいと考えていることは、第一印象というものに最も強烈なものなので、子供たちには美德というものを教えるにはいくら早すぎても早すぎるといえることはないということなのです。

カンブレー大司教はテレマコスにつぎのように語らせます。自分は年端も行かないが、自分と友人たちの秘密を守ることにはたけているのだと⁹⁾。父がトロイの攻囲に出向くとき、自分を膝に乗せて、抱擁し祝福した後、取り巻くイタケーの貴族たちに向って、友よ、わが息子の教育はみなさんの手に委ねる、もし貴方たちがこの息子の父を愛しているなら、どうかその愛を息子に向けて貰いたい、特に、秘密を守ることに対しては、是非とも公正で、誠実で、信義に厚い人間になるように教えて欲しいと言ったのだ、とテレマコスは語ります。テレマコスによれば、父の不在中、父の友人たちから繰り返し繰り返しこういっ

5) ホラティウス『諷刺』1.4.105-26

6) クセノフォン『キュロスの教育』1.2.6,7

7) クセノフォン『キュロスの教育』1.3.16,17

8) アプレイウス『演説選集』1.6

9) フェヌロン(1651-1715)『テレマコスの冒険』(1699)。フェヌロンはフランスの宗教家で、『テレマコスの冒険』はルイ14世の孫ブルゴーニュ公ルイのために書いたといわれる。

た父の言葉を聞かされたとのことです。また、父の友人たちは、私の母が求婚者たちに取り巻かれているさまを知ったときの不安な面持ち、そして、求婚者たちがもくろんでいる策略について、なんのためらいもなく自分に伝えたのだと語ります。テレマコスはずぎのように付け加えます。自分がこのように大人として扱われたこと、そして、自分に寄せられた信頼に対して陶然としたので、一度もその信頼を損なったことはないのだと。また、父のライバルたちが口にするどんな当てこすりも、秘密を守るという約束で伝えられたことを裏切らせることは出来なかったのだと。

若者は、ほぼすべての美德を実践とお手本によって学ぶことができます。

ある一定の時期に、生徒一人一人に6ペンス与え、翌日、その遣い道を報告させるある善良な人物のことを耳にしたことがあります。3分の1はつねに慈善のために費やされたとのことです。そして、ふさわしい遣い方をしたかどうかで、生徒はとがめられたり褒められたりしたとのことです。

要するに、先生たちが、生徒のマナー形成に学問に注ぐのと同じだけの配慮をしてくれば、わが国の公教育に欠けているものは何一つないのです。小生としては、マナー形成がないがしろにされている場合は、ロック氏の考えに同意せざるを得ません。優れた人物を作ることもよりギリシアおよびラテン語を好む場合には、言葉に対してとても不思議な価値を置いているに違いありません。こういった人物は、ほんのわずかなギリシア語およびラテン語を身につけさせるために、息子の無垢と美德を危険にさらす価値があると考えることができるのです¹⁰⁾。

拙論のテーマはこの上なく重要であり、小生の記憶では貴殿がまだ触れておられないと思いますので、小生自身が考えている点をお伝え致しました。これを公表なさるか否かは貴殿の判断に委ねたいと考えます。

敬具
エックス

第338号 1712年3月28日（金曜日）

これほど似通ったものはない。（ホラティウス）¹⁾

本日、悲劇『悩める母』が出版されました。私が思いますに、プロローグの作者はどこかで読んだことがある「面白くないことには意図がある」²⁾ という月並みな言い訳をしています。そして、確か、エピローグの筆者は自信満々なので、つぎの手紙に見られる、深刻な劇の結末にこういった陽気なものを書いたことへの異論を公表しても大目に見てもら

10) ジョン・ロック『教育論』47

1) ホラティウス『諷刺』1.3.18-19

2) スティールは、『タトラー』紙第38号を「本紙に面白くないと思える箇所がある場合には、なんらかの意図があることに気づいてもらいたい」という文章で締め括った。

えるものと考えます³⁾。私としても許しがたいと思います。これは能力のある人にしかやれないことなのです。

拝啓

せんだって、貴殿がこれまで貴紙で1, 2度推奨なさったことがある新作悲劇を観に行きましたとき、幸運なことに、小生の席は、貴殿と貴殿の立派な友人サー・ロジャーの席のごく近くでした⁴⁾。小生は席がお二方の近くになった幸運を感謝しました。一方からは芝居の挿話に関して心からの純粋な意見を、もう一方からは的確そのものの判断力から生まれる意見をお聞きすることができました。もっとも、正直言って、小生は勲爵士殿の意見に非常に関心を持ちましたので、貴殿のご意見を参考にする余裕はありませんでしたが。どうやら、自然の女神は勲爵士の中で役割を果たしていましたが、結末部分になると、彼を見放したようです。実を言いますと、新作悲劇に満足しますと、小生はいつもおどけたエピローグが始まるまでに劇場を後にすることにしているのです。それはエピローグが往々にして出来が悪いからでもなく、半クラウン出たくないからでもなく、劇作家あるいは小生自身が求める心地よい哀愁が得られないからでもないのです。小生は芝居の余韻を家に持ち帰りたいからなのです。小生はどんなに巧みであっても、間髪いれず飾り立てられることに我慢ができないのです。けれども、先日の夜は、貴殿の友人の意見につられ、小生の考えが変わるかもしれないと期待して、席を立ちませんでした。すると、非常に驚いたことに、勲爵士殿がアンドロマケの偉大さに感じていたのと同じように、オールドフィールド夫人の陽気さに満足しているのに気づきました⁵⁾。これは、悲劇的な出来事が終わってしまうと、すべては安全で万々歳だとする勲爵士殿の特異な人間性によるものかどうか、小生には分かりません。でも小生としては、正直言って非常に不満でしたので、劇作家がアンドロマケの命を救ったことを遺憾に思いました。そして、小生は彼女を舞台上で完全に死んだ状態にしておいて欲しかったと心から願った次第です。観察者殿、彼女が小生のために茶目っ気を残していたとは考えられないのです。小生の魂は、演技中に徐々に最高点にまで達していき、苦しみに見舞われた美德を目にすると寛大な心の持ち主なら誰でも抱く高揚感にひたっていたのです。本当に、この感動は非常に強烈でしたので、たとえ小生一人だけでであっても、残忍この上ないモーホック10人を相手に、貴殿とサー・ロジャーを守るために立ち上がることができるものと思いました。だが、閉幕前のこの滑稽なエピローグのために、小生の熱意はかき消され、気高い偉業はすべて紛れもない愚かで架空のものとなってしまいました。ほかの観客がどのように感じたか、小生にはうまく言えませんが、小生としましては、芝居の終わりには小生の魂はむらがなく調和が取れていた

3) ジョンソンは、「アンブローズ・フィリップス伝」の中で、これはわが国の劇場で語られた最も素晴らしいエピローグだと言っている。

4) 第335号参照。

5) アンドロマケを演じたアン・オールドフィールド(1683-1730)は当代きっての女優。アディソンの友人アーサー・メインウェアリングとの間に息子が一人出来た。

のですが、エピローグが終わると、すべてがひどく混乱し、冗談と真面目に惑わされたのだと言わざるを得ません。そこで、もし貴殿が小生の突飛もない思いつきをお許しくださいれば、ここにそれを書き記したいと思います。そのとき、小生の魂が肉体から離脱して、黄泉の国に下りていったとしたら、そこでとても奇異な姿形になっていたに違いないと想像せざるを得ませんでした。どうして半ば滑稽で半ば悲劇的なまだらの亡霊になっているか、そして、片方が笑みを浮かべ、もう片方が泣いているとんでもない顔つきになっているのか理解できなかったに違いありません。小生が思いますに、これに対してこれまでに聞いた唯一の弁明は、どうやら、とってつけたように、悲劇的な頭に喜劇的な尻尾をつけるのは、観客の心をさわやかにして、紳士淑女を非常に暗く憂鬱な状態で帰宅させてはならないということなのです。この帰結がどんなことなのか誰にも分かりはしません。確かに、私たちは劇作家たちが私たちの安全を考えて表現してくれる優しさには大いに感謝しています。だが、もしそれだけのことでしたら、劇作家たちに、私たちは誰一人たいして危害を加えられることにはならないのだと伝えてあげてください。そして、彼らに最善を尽くすように伝えてください。そうすれば、私たちはおそらく日々無事に過ごし、これまで以上に劇場に足を運ぶことになります。この件について小生が改革を希望していますのは、これにはひどい影響がひとつつつあるからなのです。劇場に関わりのあるわが国の非常に多くの教会音楽に携わる人々が、こういったエピローグの真似をして、即興の前奏曲に、礼拝には全く無関係な曲を持ち込み、健全な人々に大きな不利益をもたらしているのです。こういったオルガン奏者たちには、旋律は場所と本文に合致したものにすべきだということを教えなくてはなりません。教会の音楽家は説教題目と牧師さんを大切にしなければなりません。この点が欠けているために、小生は大変な迷惑がかかっていることを経験しています。敬虔で経験豊富な牧師さんが説教をし、聡明な書記が細心の注意を払って説教にふさわしい詩句を二つ選び出し、小生自身も信徒席のほかの人々と一緒に神妙な態度になっているときに、その気持は、突如として鳴り響く中2階からの活発なジグの旋律のためにかき消されてしまうのです。小生がここで述べていますエピローグが、そのうちとんでもなくひどい影響を与えているかもしれないのです。ところで、小生は確かな筋から、ポール・ロレインが痛ましい状況で思いがけない改革をし、翌月の説諭では懺悔の詩篇の代わりに、自ら作曲した素敵なバラードを用いることにしたとの情報が入っています⁶⁾。何卒、こういった増大する悪弊に終止符を打つためにご尽力くだされば幸いです。

敬具

フィジバラス

第339号 1712年3月29日（土曜日）

【アディソン】

彼は自然の骨組みの神秘的な根源について歌った。

6) ニューゲート監獄の教誨師ポール・ロレインは、死刑囚の懺悔録を編集した。

海や陸や空や激しい炎が、広大な真空から落ちてきた様子を。
 そして、落下中に、これらが手探りで一体となってまとまり、
 この美しい地球に落ち着いた様子について。(ウェルギリウス)¹⁾

ロンギノスは熱情が伴わない感情には高尚なものと語っている。そして、その考えを立証するために、古代の著者から例を引いています²⁾。ロンギノスによると、哀感というものは、崇高に生命を吹き込み、それを煽るかもしれないが、必ずしも必須条件ではないということです。さらに彼の言うところでは、したがって、熱情を煽り立てるのに秀でている人は往々にして荘厳で崇高な書き方をする才を欠いており、その逆もしかり、ということです。ミルトンはこの双方の書き方に習熟しています。これから論じようとする第7巻は、熱情を交えないで熱情を煽る崇高さを伝える実例となります。ミルトンはある種沈着で物静かな威厳に包まれているように思われます。第6巻に較べると、感情はそれほどみなぎってはいませんが、たとえば壮大な観念に富んでいます。第6巻は、荒れた海のように、混乱に包まれた偉大さが描かれていますが、第7巻は、穏やかな海のような想像力を喚起させ、読者の心を激動とか動揺といったことに巻き込むことはありません。

ロンギノスは崇高さを生み出すためのルールをいろいろ定めました。特に、著名な先人たちの真似をして、それと同種の作品を作り出すことに専念すべきだと語っています。とりわけ、詩的な題材を扱う場合には、ホメロスがどういった書き方をしたのか検討する必要があります³⁾。こうすることによって、才能に恵まれた人なら、先人の燃えるような思いを獲得し、卑屈にならずに、自分のものとして書くことになります。ウェルギリウスには、ホメロスに刺激を受けた素晴らしい一節が数多く散見されるのです。

ミルトンは自身の才能に頼るだけで、申し分のない作品を生み出すことができましたが、明らかにロンギノスが推奨した模倣をすることによって、彼の構想を大いに奮い立たせ高尚なものにしたのです。

6日間の御業の説明をする第7巻では、ミルトンは天地創造の驚異を知らない異教の著者の助けはほとんど借りませんでした。だが、聖書にこのテーマに関する輝かしい詩文が数多くありますので、ミルトンは第7巻全編を通じて、こういった詩文の引喩を数え切れないほど用いています。上述のロンギノスは異教徒でしたが、ユダヤの立法者が『創世記』第1章の天地創造について語った崇高さに目を留めました。聖書には、このテーマに関連して、同種の荘厳さを募らせる一節がそれ以外にも数多くあります。ミルトンは、こういった一節を自らの詩に利用するときに、また、寒冷地の読者よりも想像力が舞い上がる東方の激しい調子をうまく和らげるときに、実に見事に彼の判断力を駆使しています。

ラファエルへのアダムの語りかけは創造以前の自然界での出来事を語ろうとするものですが、とても偉大で荘厳なものです⁴⁾。ラファエルに日は沈むにはまだ時間があると語る

1) ウェルギリウス『エクロガエ(詩選)』6.33-36

2) ロンギノス『崇高について』8

3) ロンギノス『崇高について』14.1

つぎの数行は、この種のものとして秀逸です。

大いなる日の光は、傾きかけてはいますが、
沈むまでにはまだ長い距離を駆けなければなりませんまい。
太陽はあなたの声に、あなたのその力強い声に呼び止められて
大空に懸ったまま、己の誕生や自然が漠々たる混沌の中から
生まれでた経緯が語られるのを聞こうと暫くは留まりましょう⁵⁾。

ラファエルが創造主の天地創造の動機を語るとともに、わが始祖に節度のある知識欲を持つようにと仕向ける箇所は、実に義にかなったものであり、かつ、美しいものです。聖書で語られるように⁶⁾、世界は救世主が創られたのであり、救世主は父なる力を有し、天使たちの一群に取り巻かれ、御業を行うのにふさわしい威厳に満ちた姿で登場します。私たちの考えでは、これは全能を最大限に行使しようとする姿にほかなりません。わがミルトンは、ある預言者の「わたしが目をあげて見ていると、四両の戦車が二つの山の間から出てきた」⁷⁾という言葉から実に美しい表現を駆り立てられたのです。

彼の乗られた戦車の周囲には、智天使、熾天使、能天使、
座天使、力天使その他の翼をもった夥しい数の天使たちと、
これまた翼をもった多くの戦車の群れが屯していた。
神の武器庫から現われたこれらの戦車は、厳かな日に
備えていつも装備をつけたまま、神の軍需品として、
昔から二つの銅の山の幾千、幾万となく収められていた
ものであった。それが今、自ら動いて出てきた。
その内に、主の御意思をかしこむ霊が生きて動いていた
からであった。天は、黄金の蝶番を軸として動く永久に
朽ちることのないその門を、妙なる和音を発しつつ大きく
開いた⁸⁾。

私は以前この神の戦車と天国の門について取り上げたことがあります⁹⁾。そこで、今回は、ホメロスが天国の門はおのずから開くのだという、これと同じ考えを述べているとだけ付け加えておきたいと思います。ホメロスは、御子は後ほどそこから飛び立って行くのだが、「おのずから、天つみ空の大門の扉は、軋んで開いた、それを守るは季節の神女とて、久方の空、またオリュンポスを司り、群がる雲をあるいは闢き、あるいは鎖す役をあずかる」¹⁰⁾と語っているのです。

4) 『失樂園』第7巻70-108行。

5) 『失樂園』第7巻98-102行。

6) 『ヨハネによる福音書』第1章3、『エペソ人への手紙』第3章9、『ヘブル人への手紙』第1章2など。

7) 『ゼカリヤ書』第6章1

8) 『失樂園』第7巻197-207行。

9) 第327号、第333号参照。

10) 『イーリアス』第5書748-51行、第8書393-5行。

私は全編を通じてつぎの叙述ほど崇高なものはないと考えます。ここでは、救世主は天使たちの先頭に立って、混沌を見下ろし、その混乱を鎮め、混沌の真っ只中へと突進し、創造の最初の輪郭を描き出すのです。

天使たちは地面に立ちとどまり、その岸辺から、眼前に展開する茫々漠々として測るべからざる深淵を見た。その深淵は、暗く、荒涼とし、凄惨をきわめ、あたかも大海のように荒れ狂っていた。しかも、激しい疾風と、山のように大きくうねりながらこの天の高所^{たかみ}を襲い、中心と極端とを一つに混ぜ合わせようと狂奔する怒濤のために、その奥底から揺すぶられ翻弄されていた。

『黙せよ、汝ら、怒濤よ！ 汝、深淵よ、静まれ！』と、創造の主なる御言^{みことば}はその時言われた、そして、また、『汝らの軋轢^{チェラフ}を止めよ！』とも。御子はそのままそこに留まることなく、智天使らの翼に乗り、父なる神の栄光につつまれて混沌の只中へ、また未だ生まれざる世界の只中へと突進された。混沌も御子の声を聞き、それに服したからだ。御子に扈從^{こじゅう}していたすべての天使たちも、天地の創造を、そしてまた彼の力の示すもろもろの驚異を、見ようと燦然たる列をなしてその後に従った。やがて焰に包まれていた戦車の車輪が止まった。彼は、かねてから神の永遠の庫の中に用意されていた黄金の両脚器^{コンパス}を懷から取り出し、この宇宙とすべての被造物との限界を定めようとされた。一方の脚を中心におき、他方の脚を、広く暗澹たる混沌の深淵の中めがけてぐると一回転させられたあと、次のように言われた。『ここまで拡がるがよい、ここまで汝の境界とするがよい。おお、汝世界よ、これが汝の定められた正しい周辺と心得るのだ！』¹¹⁾

黄金の両脚器^{コンパス}という考えはそのままホメロスにもあり、この素晴らしい叙述の中にあって実に高潔な事例となっています。ホメロスは神々について語るとき、同様に卓越した想像力を惹起させるいくつかの武具を神々に持たせています。これは『イーリアス』第5書に登場する手には雲楯と槍、頭には兜をいただいたミネルウァの描写をご覧いただければ十分にお分かりいただけます¹²⁾。これでもって、彼女は敵の軍勢を打倒します。なお、頭にいただいた兜には百の都の戦士らを彫りこんであり、この兜だけで一つの軍勢の代わりとなるに十分です。上述の黄金の両脚器^{コンパス}は、御子が手にするのにとてもふさわしい道具です。プラトンは御子のことをどこかで天上の幾何学者と呼んでいるのです¹³⁾。詩というも

11) 『失樂園』第7巻210-31行。

12) 『イーリアス』第5書738-47行。

13) プルターク『宴会』8.2

のは、抽象的な考えに寓喩や気のきいたイメージをまとうせることに喜びを見出しますの¹⁴⁾、創造についての荘厳な描写がある預言者の言にならって構成されることは理解できます。この預言者は、全知全能の神のことを「だれが、たなごころをもって海をはかり、指を伸ばして天をはかり、地のちりを梲に盛り、てんびんをもって、もろもろの山をはかり、はかりをもって、もろもろの丘をはかったか」¹⁵⁾と語ります。別の預言者は、天地創造のとき、神が「地の基をすえ、地の上に測りなわを張った」¹⁶⁾と語ります。また、この預言者は別の箇所¹⁷⁾で、神が「天を晴れわたらせ、北の天を空間に張り、地を何もない所に掛けられる」¹⁷⁾と語ります。この最後の気高い考えをミルトンはつぎのように表現します：「そして、自力で均衡を保つように造られたその地球を中心に懸けた」¹⁸⁾。

第7巻における美点は数限りなくありますので、本日の紙面でそれをすべて列挙することは不可能です。ミルトンはこれに英語という言語の持つ全活力を傾注しています。天地創造の素晴らしい場面がつぎつぎに登場しますので、読者は、御業の目撃者である天使たちの合唱隊に混じって、この素晴らしい御業の現場に立ち会っているような感覚にさせられます。第1日目の結末はなんと大きな栄光に包まれていることでしょう。

こうやって、まず第一日目に、夕べと朝が生まれた。

天使たちは、初めて暁闇について東方の燦然たる光が
忽然と現われてくるのを見たとき、期せずして合唱隊となり、
この天と地の生誕を祝わずにおれなかった。彼らのどっと
あげた歓声は、まだうつろで内実さだかならぬ、球状の
この宇宙の隅々にまで鳴りひびいた¹⁹⁾。

第3日目にも、同様に高揚した思考が伺えます。第3日目には、山々と海が造られたのです。

すると巨大な山々が忽然と姿を現し、その広々とした
裸の背を高く雲の中まで擡^{もた}げた。頂上は屹然として大空に
聳え立った。盛り上がる山々が高くそそり立つにつれ、
広く深く窪んだ谷間が、下へ下へと沈んでゆき、滄海^{わだつみ}を湛えるのに
ふさわしい広漠たる海底となった²⁰⁾。

第3日目にはまた、植物や草木が生まれます。ここには他の詩人たちが春の描写で惜しみなく与える優美さが満ち溢れており、読者の想像力は同様に驚くべき美しい場面へと誘われます²¹⁾。

14) アディソンは、ウェルギリウス『農耕詩』論（1697）の中で、倫理性と自然哲学の対象を詩の真髄である美しい描写とイメージで覆い隠すという彼の技巧を賞賛した。

15) 『イザヤ書』第40章12

16) 『ヨブ記』第38章4, 5

17) 『ヨブ記』第26章13, 7

18) 『失樂園』第7巻242行。

19) 『失樂園』第7巻252-7行。

20) 『失樂園』第7巻285-90行。

第4日目には、天空の栄光がいくつか登場します。

こうやってまず栄光燦然たる太陽が、東の空に昼の王者として
現われ、あたり一帯の地平線にくまなく光輝を浴びせ、
勇躍して天道を東から西に向かって駆け出したのだ。
ほの白い『黎明』と『昴宿』が、快い影響力を
ふりまきながら、その前方を踊りつつ進んでいった。
明るさでは劣っていたが、月もその真正面に当たる西に
いわばその鏡といった具合に置かれ、そこからその顔いっぱい
太陽の光を受けていた。そのような位相では他の光を
なんら必要とせず、終始、夜にいたるまでそのまの
距離を保ってゆき、夜になるとともに今度は自身が
東の空に輝き出し、天の巨大な軸の上を回転しつつ進みゆき、
折から時を同じくして躍り出て半球の夜空を鏤めた
千にも及ぶ小さな光体と、いや、千どころか数千数万
にも及ぶ星の群れと、夜に対する己の支配権を仲よく領ち合った²²⁾。

皆さんは、ミルトンが6日間の御業について挿話の範囲内でどうしてこれほど簡潔に描けたのか、同時に、どうしてこれほど真に迫った描き方が出来たのか不思議に思われるに違いありません。これは第5日目や第6日目の描写でも顕著です。この両日に、爬虫類から巨獣^{ビヒモス}にいたるあらゆる生き物が生まれたのです²³⁾。獅子とリヴァイアサンの二つは生き物の世界では最も威厳のあるものなので、読者はわが著者のその叙述には非常に繊細な詩心が發揮されていることに気づきます²⁴⁾。第6日目の結末は、人間の誕生です²⁵⁾。ラファエルは、天国での戦いの後のように、この機会を捉えて、アダムに服従の大切さを思い出させます。これこそ、ラファエルの訪問の主要な目的だったのです。

ミルトンは、その後、救世主は天に帰って行き、自らの大いなる仕事を確かめたのだと語ります。この箇所には言語に絶するほど崇高なものがあります。ここで、ミルトンは数限りない栄光に満ちた荘厳な時を描写します。救世主は意気揚々と永遠の門を潜り抜けて天へと昇っていき、新しく造られた世界を満ち足りた気持で眺めます。自然界のあらゆるものはその存在を喜んでるように見えます。「明けの星は相共に歌い、神の子たちはみな喜び呼がわった」²⁶⁾ のです。

かくして、夕べと朝が第六日目をしめくくっていった。

いや、それが本当に終わったのは、創造主が、まだ

21) 『失樂園』第7巻309-38行。

22) 『失樂園』第7巻370-84行。

23) 『失樂園』第7巻387-504行。

24) 『失樂園』第7巻463-6行、412-16行。

25) 『失樂園』第7巻505-47行。

26) 『ヨブ記』第38章7

疲れてはおられなかったにもかかわらず仕事をやめ、
 そのいと高き住処である天の天へと帰って行かれ、
 そこから自らの王国に今度加わったこの新しく造られた世界を見、
 それが玉座から眺めてどんな風に見え、自らの大いなる
アイディア意匠に应じていかに善く、いかに美しいものであるかを
 確かめられた時であった。創造主は、歓声と、天使ならではと
ハーモニー思われる美しい諧調を奏でる無数の豎琴の交響楽に送られて、
 天に昇ってゆかれた。大地も、大気も、どよめいた—
 (お前も、以前に聞いたはずだから、覚えていよう)
 もろもろの天もすべての星座も、鳴り響き、それぞれの
 定められた軌道をめぐっていた遊星の群れも、その楽の音に
 聞き惚れて運行を停止した。その間に、創造主のつくりぬし輝かしい
 凱旋の列は、歓喜に包まれ天に昇っていったのだ。
 『開け、汝ら、永遠の門よ!』と、天使たちは歌った、
 『汝らもろもろの天よ、その生ける戸をひらけ!』
 今しも厳かなる仕事、六日にわたる天地創造の仕事より
 帰り来たり給う大いなる創造主を迎え入れよ!……』²⁷⁾

私としては、天地創造についての第7巻を終えるにあたって、最近このタイトルで発表された詩について触れざるを得ません²⁸⁾。この作品の意図も熟練度も素晴らしいもので、わが国の詩作品としては最も有益で気高いものの一つと見なす価値があります。読者は、深遠な哲学が詩の魅力によって生命を与えられていることに気づき、実に見事な想像力がふんだんに発揮されながらも、そこには理性の力が存在していることを知って満足なさるに違いありません。この作者はあらゆる神の御業の意図を探ろうとすれば、必ず第一原因に対する知識につながるのだと言います。要するに、彼は数え切れないほどの明白な事例を取り上げて、シラクの子イエスが堂々と世界を創造する神に備わっていると考えた叡智について解説をしているのです。彼はつぎのように言います:「彼は彼女を創り、見、構成員とみなし、彼のあらゆる仕事の中に彼女を注いだのだ」²⁹⁾と。

第340号 1712年3月31日(月曜日)

【ステイール】

誰なのか、わが家を初めて訪れたこの客人は。

なんと高貴な振る舞いと面立ち、なんと力強い胸と肩か。

(ウエルギリウス)¹⁾

27) 『失樂園』第7巻550-68行。

28) これは第313号に広告が載った。

29) 『ベン・シラの知恵』1.9

1) ウェルギリウス『アイネーイス』第4歌10-11行。

他者に対する優越感を見せずに、卓越した資質を発揮できることほど高潔なことはない、と私は考えます。換言すれば、身を処する場合に、たとえいかなる資質を有していても、万人にはない資質を自慢しないことが偉大な人物の責務なのです。人の価値は、公共心、正義、そして誠実さといった観点から判断し、その他の資質は美徳を発揮するための添え物と見なすべきなのです。偉大な人物なら、賢明あるいは勇敢であっても、そんなことは他者にとっては大したことではなく、高邁な資質は人々のために用いればいいのだということが分かっています。人々の賞賛や心遣いを求めたり、傑出することをほかの何よりも大切に考えたりする人は、すぐに賞賛を侮蔑に変えてしまうに違いありません。資質に気づいていない人に美点が与えられないのは確実です。資質を活用して初めて価値があるのだという感覚によって、さもないと不快になってしまう優越感が好ましいものになります。この観点からすると、資質は誰もが共有するものと考えられます。これは持ち主に心地よく愛想のよい感じで、威厳とか力とか名声を添えます。そして、彼のことを知らない人々も全員が、おそらくは誰もが共通して持っている、その人の人柄、振る舞い、顔かたちを好奇心を持って見つめることになります。その他様々な理由から、すべての人が憧れに近い好奇心を持って英雄的なその人物を見つめるのです。という訳で、ヨーロッパ解放のために貢献し、最近イングランドを訪問した公爵²⁾の背丈、物腰、容貌について詳細を教えて欲しいとの全国からの手紙が私のところに寄せられています。寄稿者たちが彼のことを知りたいと願っているときに、上記の活動からこの人物の説明をしますと、好奇心に満ち溢れた人たちは当惑するに違いありません。寄稿者たちの問い合わせには、常に、自分たちに関わり、自分たち自身の境遇から生まれた何かがあるものです。ウェールズの私の友人からは、軍隊を率いてアルプスを越えたこの素晴らしい人物の説明をするときには正確を期するように、もし可能なら、地図にある道案内をした農民がまだ存命であるかどうか知らせて欲しいとの要請が届いています。人間性の研究に没頭している大学の紳士からは、機会があれば、公爵とわが国の先の司令官との会談の内容を教えて欲しいとの依頼を受けています。

このように人々の思いは受けてきた教育や環境によって変化しますが、この輝かしい人物に対しては、誰もが一様に賞賛の念を込めた敬意を払います。私は彼がオランダに到着するのを心待ちにしていました³⁾。寄稿者のみなさんにお知らせしておきますが、オイゲン公をこの目で見たくてたまらなかったのです。先ほど述べましたように、この件で私に手紙を下さった人々のすべての期待に沿うのは極めて困難なことです。また、クレモナを奇襲した人の顔に伺える実に巧妙な目配せやトリノの塹壕を奪取した大胆不敵さについても言葉では表現できません⁴⁾。だが、一般的に、彼を目にした人は、彼には賢明な人、影

2) サボイア家のオイゲン公(1663-1736)はマールバラと同盟を組んでルイ14世と戦った。彼はこの年の1月5日から3月18日までイングランドを訪問していた。

3) 「昨日の朝、オイゲン公はオランダに向けて出発するためにグリニッジで船に乗り込んだ」(1712年3月18日火曜日、ポストマン紙)。

4) 1702年2月、オイゲン公はクレモナのフランス軍の守備隊を急襲し、指揮官ヴィルロワを捕らえた。

響力のある人が持っていると思われる何かが備わっていることが容易に感得できるのだと
言うことができます。オイゲン公はあらゆる任務を遂行するのにふさわしい体格をしており、
機敏さ迅速さを必要とする場合は言うまでもなく、威厳に満ちた儀式の場合にも優美
に振る舞えるだけの身長もあります。風貌は油断を許さず沈着で、眼光は鋭く思慮深いの
ですが、火花を発するというよりはむしろ警戒を怠りません。物腰は考えられないほど気
楽で、人前での振る舞いはいつの間にか人々の中に入ってゆき、人々のおもねりを受ける
のではなく、その一員になるほど優美なものです。体つきや手足の作りは、見事にバラン
スがとれています⁵⁾。顔つきにもどこか崇高なものが伺えます。これは彼の資質や性格か
らではなく、彼の生来の気質から生じているように思えます。彼が大勢の人たちに取り巻
かれる場合には、それを喜ぶのではなく堪え忍んでいるのは明らかです。人前では、彼は
自分が人気者になっていることを喜ぶというよりもむしろ、私たちの善意に応え、私たち
の好奇心を満たしているようでした。彼の思考は危険にさらされても乱れることはありません
ので、華やかで荘厳な場でも落ち着きをなくすことはほとんどありません。いずれの
場合にも、偉大な魂はそこから魂を救い出す最適な方法を考えているだけなのです。もし
この英雄が、アレクサンダーに顕著であった並外れた企てをやりたいとの強い願望を持っ
たら、彼はそれをカエサルのように公正と礼節と良識でもって実行します。彼に企てをじ
っくり考えることが出来る心があることが容易に認められます。つまり、彼には我慢強く
その機会を待ち、大きな功績をあげる心積もりが出来ているのです。オイゲン公には、人
間として申し分のない知恵と勇気が備わっています。こういった気高い能力が協力して、
動揺する心に侵入してくる虚栄心とかひけらかしとか功名心とかその他あらゆる悪徳を追
い払います。心身のこういった資質がこの人物を非凡にしていますので、ほかのひと何ひ
とつ変わらないように見えます。運命によって定められた境遇に置かれて初めて、彼の本
性が発揮されたのです。したがって、オイゲン公に出会って、一紳士だと教えられれば、
控え目で素敵な方だと言うに違いありません。もしこの方がオイゲン公だと教えられたと
しても、よそよそしい賞賛の念は心易しい善意へと代わります。この話はわが読者にふさ
わしいと考えました。わが国にもこの人に劣らない長所を備えた英雄がおられます⁶⁾。彼
は逆境にあるこの方に敬意を表したのです。

第341号 1712年4月1日（火曜日）

【バジエル】

勇気を呼び戻し、悲しみと恐れを捨てよ。(ウェルギリウス)¹⁾

1709年9月には、ポー川溪谷を進み、約6万のフランス軍に包囲されていたトリノに援軍を送り込み、フランス軍に壊滅的打撃を与えた。

5) スウィフトは1月13日宮廷でオイゲン公に会い、ステラへの手紙で「オイゲン公は醜いどころか、なかなか立派な顔立ちだ」としたためた。

6) マールバラ公は、1711年12月31日に職を解かれていた。スティールの第3子が、オイゲン公来英中の3月4日に生まれ、「ユーージン」と命名した。

先週金曜日には、寄稿者フィジバラスの願いを聞き入れて、新作物のエピローグに関する彼の手紙を活字にしましたので、今度は彼とは意見を異にする紳士²⁾から来た手紙を公表しても、彼が腹を立ててもらっては困ります。

前略

先週金曜日、エピローグを攻撃なさっておられることを知って驚いています。このエピローグは、町では誰もが喝采しており、わが国の劇場では見られなかったほどの誉れでもって受け入れられているのです。

第一夜、観客はオールドフィールド夫人がエピローグを2度繰り返すまで、舞台から退場させなかったのです。第二夜は、アンコールの呼び声が第一夜と変わらず凄まじく、彼女はまた2度繰り返さざるを得ませんでした。第三夜も、依然として2度要求されました。要するに、第三の上演の後に登場する他のエピローグと違ってはいるのです。このエピローグに関してはすでに9回繰り返されました。

正直言って、これまで公平な批評で名高かった貴紙に、町の人たち全員の意向に逆らった非難が載っているのを知って大いに驚いたわけです。

私としては、新作物のエピローグが陽気だという理由でわざとらしいという嘆かわしい寄稿者の意見をどうしても認めることは出来ません。学識を披露させてもらいますと、古代の悲劇では、プロローグやエピローグは実際に芝居の一部だったのです。だが、わが国の舞台では、これらはそれ自体が、芝居そのものには全く関係のない別個の興行だということは周知の事実なのです。

芝居が終わると、オールドフィールド夫人はもはやアンドロマケではなく、オールドフィールド夫人なのです。そこで、率直な寄稿者がおっしゃるように、劇作家は「舞台上でアンドロマケを完全に死に到らせる」のですが、オールドフィールド夫人は愉快的エピローグを口にすることが出来るのです。死だけでなく殉教を描いている悲劇にこの実例があります³⁾。この作品ではネル・グウィンが聖カタリナに扮しました。彼女は舞台上で完全に死に到りますが、わが国の悲劇で死体を運び去ることを仕事にしている人たちが遺体を取り除こうとしたとき、彼女は突然起き上がり、実に滑稽だが、同時に、実に素敵なエピローグを語り始めたのです。

さて、お前たちは頭がおかしいのか。このいまいましい者ども、
私は起き上がってエピローグを述べなくてはならないのです。

1) ウェルギリウス『アイネーイス』第1歌202-3行。

2) エピローグの作者はバジエル。バジエルは後年『ザ・ビー』(1733年7月)で、淫らとの非難に反論している。

3) ドライデンの『非道な恋』(1669)で、ヴァレリアを演じたネル・グウィンは剣で自死する。聖カタリナは実際にはブテル夫人が演じた。バジエルが聖カタリナを演じたとしているのは、ドライデンのエピローグの結末部にある「私の墓銘碑については、詩人は信用せず、自分で書くことにする。ここにネルが横たわる。彼女は貧しい暮らしをしていたが、聖カタリナを演じ、王妃として亡くなったのだ」に由来するのかもしれない。

ドライデン氏は常にこういった楽しい手法を用いました。彼は当時の最も優れた悲劇作家ではなかったにしろ、誰からも、彼がプロローグやエピローグで非常に楽しい逸脱をすることが認められていました。『クレオメネス』『ドン・セバスチャン』『ギーズ公』『アウラング・ゼーブ』『意気揚々とした恋』などのエピローグはすべてこの前例なのです。

さらにこのやり方は、その後しばらくして上演された『フェードルとイポリット』⁴⁾の素晴らしいエピローグによって証明できます。これ以外にも、著者たちが観客を楽しませようとした例が数多くあります。かりに彼らが『フェードルとイポリット』のエピローグの書き手ほど成功しなかったとしたら、それは好意が不足していたためではないことの証です。

さらにこのエピローグの陽気さはフランスの芝居の終りにあるので、それだけ一層ふさわしくなるのだと言わなくてはなりません。なぜなら、周知のように、ヨーロッパでも洗練された嗜好の持ち主と考えられているフランス人は、彼らの悲劇を常に彼らの言う「小品」で締め括るのですから。この小品は観客を陽気にさせ大いに満ち足りた気持で劇場から送り出すために考案されているのです。悲劇の主人公を務めた同一人物が、小品でも主役をするのがごく一般的です。そこで、私自身、パリで、同夜に同一人物がオレステス役とリュバン役をこなしているのを見たことがあります⁵⁾。

確かに、貴殿が以前の思索⁶⁾で述べられていました悲喜劇は、まだ感情の流れが持続している間に、それを断ち切ってしまいますので欠陥といえます。ですが、今回のケースはそれとは全く異なります。ここでは感情はすでに十二分に流れきっているのです。

この新作物のエピローグはわが国の優秀な作家のやり方に倣って書かれていますので、バッキンガム公が『リハーサル』で言うような他の芝居に資するものではなく⁷⁾、全面的に、作品の出来事から生まれたものです。

悲しみに沈んだ寄稿者が、その人の言う「滑稽なエピローグ」に異議を唱える唯一の理由は、彼が鬱々とした気持で帰宅したいからなのです。私はどうかと言いますと、正直言って、上演中に苦悶するだけで十分であると思います。私は上機嫌で帰宅し眠りにつきたいのです。しかしながら、フィジバラスが悲嘆に暮れていたく涙を流していたいのでしたら、ただこれまでのやり方を踏襲し、半クラウンの価値のある悲しみを獲得して、エピローグが始まるまでに劇場をそっと抜け出せばいいのです。

この悲劇の天才がアンドロマケが彼に加えた大きな危害について訴えるのを聞くだけで十分心地のよいものです。それは何だったのか。何だって、彼女が彼を笑わせたんだ。こ

4) エドモンド・スミスによれば、ラシーヌの『フェードルとイポリット』の翻案物は、ハイマーケット劇場で1707年4月21, 22, 25, 26日に上演され、オールドフィールド夫人が囚われの王妃イスメナを演じたとのこと。

5) ラシーヌ『アンドロマック』、モリエール『間抜けのジョルジュ』

6) 第40号参照。

7) 冒頭のシーンでベイズは「プロローグもエピローグも私が書いたのだ。ともに、他のものに負けないくらいの出来栄だ」と言う。

の気の毒な紳士の難儀を聞いていると、私は死ぬほど面白いハーレクインのことをを思い出します。この紳士は、直後に、怒りに対する勘違いしたちょっとした悲しみによって、演技中に非常に遺憾に思ったので、過度の悲嘆に駆られた自分ならとても荒いモーホック10人を相手に出来たものと思うと言うのです。私は、苦悩にこれほど気難しい人物が常軌を逸した憂鬱の発作の気晴らしをしたのは喜ばしい出来事だったと考えざるを得ません。悲しみを抱えたこの紳士の武勇を見てみると、「悲しげな表情の騎士」⁸⁾を思い出します。この騎士はかつての騎士物語で途方もない振る舞いをします。彼自身が言うように、彼の魂が「体から離れ、詩的な黄泉の国に下りていったなら、とても滑稽な姿を帯びていたに違いない」ということを私は快く認めます。

観客に元気を回復させるために、悲劇的な頭に喜劇的な尻尾をつけるという奇想に関しては、これは専門用語のひとつですので、私にはその利用の仕方は分かりません。

高雅な作家は劇場から教会へ、また、教会から劇場へと唐突に移行させます。

教会に関しては、こういったエピローグがオルガン席の愉快的なジグを生み出しており、聡明な書記が細心の注意を払って説教にふさわしい詩句を二つ選び出し、小生自身も信徒席のほかの人々と一緒に神妙な態度になっているときに、その気持は、突如として鳴り響く中2階からの活発なジグの旋律のためにかき消されてしまうのだ、と彼は考えています。

この紳士はつぎにタイバーンに思いを寄せ、友人ポール・ロレインの悲劇が刷新されたのではないかと危惧しているようです。

同時に、この陰鬱な紳士は深刻な芝居の後で行われる陽気なエピローグにとっても憤慨しており、法律によって屈辱的な死を宣言されるこれら不幸な悪党について語っています。そして、彼は悲劇や毎月の上演のお粗末な茶化した表現によって、場違いなときに読者を楽しませようとしています。

草々

笑いを愛する者より⁹⁾

第342号 1712年4月2日(水曜日)

【スタイル】

これは、人々を中傷するためでなく、正義の、
人々を傷つけるためでなく、謙虚さのためなのだ。(キケロ)¹⁾

礼節への配慮は、一般に、とりわけ女性にとって、人生において考慮すべき大切な規範です。そこで、私としては、実にひどい人物について語っているつぎの手紙を無視するわけにはいきません。

8) ドン・キホーテのこと。

9) 「笑いを愛する者」は、アフロディーテのあだ名(『オデュッセイア』8.362など)。

1) キケロ『義務論』1.28.99

観察者殿

今日貴紙に目を通していました。そして、12月6日付けの新聞、そうです、夫不在時のアステリアのなんとも気立てのよい悲嘆を読んでいまして、いろいろ考えさせられました。これはまさに、兵士であり、日々命令を受けている私自身の生活の状況から生まれるものと変わりがありません。ごく当然なことなのですが、私は親愛なる妻を家に残しておかざるを得ないのです。私は確信しているのですが、現在、妻は夫婦間の愛情に関してはアステリアと全く同じ状態に置かれています。ところが、女性の中には私の妻と私が置かれている状況にふさわしくない振る舞いをする人がいます。私が軍務につくまでは思いもつかなかったような振る舞いです。私が心を痛めるのはある若い婦人の振る舞いのことなのです。そこで、ここではそのお話をお伝えしたいと考えます。女王陛下の軍隊の将校であるホーテンシアスは、イングランドのある地方で、たまたま郷士の屋敷に招かれたのです。そして彼は大歓迎されました。民間人はさまざまな冒険をする兵士たちを快く迎え入れるわけです。彼も高圧的な態度ではなく、心優しく、くつろいだ、愛想のよい振る舞いをします。ホーテンシアスはこの屋敷にしばらく滞在し、一日中自由に振る舞いました。同時に、昼間には、この郷士の美人の娘シルヴィアと口をきかざるを得ませんでした。都会暮らしの人々は、散歩中に見かけるとどんなささやかな住まいにもえも言われぬ感銘を受けるものです。そして、通りがかったござっぱりとした田舎屋で暮らしたら、現在の状況で暮らすよりはるかに幸せだろうと考えるのも自然なことです。これまで騒然とした生活を送って来たホーテンシアスは、いつの日か訪れる心地よい隠遁生活の利点を夢想しました。とりわけ、彼がシルヴィアのような女性こそが幸せをもたらしてくれると考えるのは十分ありうるのです。世間にはさもしい動機が充満していますので、ホーテンシアスには、娘の資質に何一つ付け加えない親に何も疑義を差し挟まず結婚を申し込めば寛大な行為と受け止められることが分かっていました。結婚式は父親の屋敷で行われました。結婚式が済むと、寛大な夫は彼女の生活状態に応じたお金を割り当てることはせず、妻を彼の最愛の人、彼の誇り、彼の自慢の種と考えました。というよりはむしろ、彼が選んだ女性に、良識のある人物が何のためらいもなく誇りと虚栄心を注ぎ込み、彼女を豪華な衣服と高価な宝石で飾り立てたのです。とはいえ、彼は彼女に自分はこれは最善を尽くしているのであって、自分がとても楽しみにしている女性へのうしろめたさからくる誇示であって、こういったことを十分考えて欲しいと忠告することを忘れませんでした。そして、彼女に、以上のことをきちんと受け止め、彼女の言動が、こういった取るに足らないものを大事がる気持からではなく、夫の気持に即した気持から身繕いをしているように見えれば、宝石もガウンもレースも更に一層似合うと考えてもらいたいと頼みました。ホーテンシアスは、女性にとってはとても過酷なこの訓戒に、自分が帰って来るまで必ず田舎で友人たちと過ごしているようにと付け加えました。ホーテンシアスが出掛けるとすぐに、姿見に自分の姿を映していたシルヴィアは、自分に対するかの愛はひとえにたまたま自分を目にしただけのことだと思いました。そして、彼女は他の人たちの目に入らなかったのはただただ自分の不運だったのだ、世に埋もれた育ちだったがとても品がよく、宮廷や町のお付き合い

がなかったがとても聡明な自分なら、もっと素晴らしい男性から話があったはずだと確信します。そこで、彼女はこれだけの美点を世間から隠さないことにしました。そして、彼女は、この上なく寛大な夫の不在を度外視して、今では町では最も軽率な女性となり、夫のことを締め出し、絶えず現代が生み出した愚かこの上ない若者たちを引き連れている女性となっています。そして、この若者たちを楽しませるために、彼の命の危険に劣らず苦勞して入手されるものですが、ホーテンシアスが出してくれるそのお金を散財している次第です。

さて観察者殿、この女性を当然のことながら罪人として扱うことは貴殿のお仕事としてふさわしいことだと思われませんか。貴殿ならこの上なく厳しいご意見を述べていただける筈です。女性の皆さんに、死後よりも不在時の振る舞いにこそ責任があることを知らせてあげてください。死んでしまいますと、女性の軽率な行為によって名誉を汚されることはありませんが、生きていますと、無知な愚か者の返礼があり、笑い者になる可能性があります。愚かな行為は、存命中にはふさわしくないことですが、善良な人物を必ずや笑い者にしてしまい、善良な交際仲間を台無しにしてしまうのです。

敬具

現代は、厳格な振る舞いというものはことごとく情け容赦なく無視されますが、その対極にあるもっとひどい行為はごく普通の愚行となります。女性には、この二つの罪のうちどちらを夫が許しやすいのか考えさせてあげてください。つまり、交際仲間を喜ばせるほど愉快に過ごさない罪と、夫の不利になるように、部屋にいる全員の欲望を掻き立てる罪のどちらを許すことになるかを考えて欲しい訳です。そうすれば、女性は簡単に自らの振る舞いを定めることができます。私たちは実際に多くの女性を公的な生活の場に連れ出しており、昨今では、女性たちがある種の名声に影響を与えていることが分かります。だが、私としては、公的な場に出たいという女性の意に敢えて背かざるを得ません。女性の最大の仕事は家庭生活にあるのです²⁾。女性は自らの立居振舞が父ないし夫の家に与える影響の度合いによって非難されたり賞賛されたりします。この世で女性がやるべきことはすべて、娘、姉妹、妻、そして母としての本分の中に含まれています。こういったことはすべて、たとえ婦人がオペラあるいは集いの場で高潔そのものの振る舞いをしていないにしても、うまく実行されています。同様に、適度な知性、簡素なドレス、慎みという点においても、矛盾していません。だが、女性の頭の中身そのものが変化して、ぬきんであることができる生活状態を大切にすれば、これ以上立派なことはありません。しかし往々にして、努力や喜びや野心をそのまま生活の満足感を持続させるものに振り向けますので、これはとどまることがありません。だが、これはいかに鼻屑目に見ても、若さや幸運と同じ運命をたどるのです。そして、最善の結果を考えてみても、自らの境遇を人生に対する嫌悪感

2) レイ・ブランチャード「リチャード・スティールと女性の地位」(『文献学研究』第26号(1929))参照。スティールが1714年に出した『婦人の蔵書』では、娘、妻、母、未亡人、愛人と分けられている。

でもって見ざるを得なくなり、自己嫌悪に陥るか他者をあざけるかのどちらかになるのがおちです。ところが、自分の事を、当然そう考えるべきなのですが、補助的な種と考えますと、(男性のためだけでなく、自分たち自身の幸福と安楽のために)ぬきんでたいとする大望はそれにふさわしく振り向けられることになり、人生のあらゆる場面において、父、夫、兄弟姉妹、あるいは子供たちに光彩を添える機会には事欠かなくなります。

第343号 1712年4月3日(木曜日)

【アディソン】

生命の息ぶきは転々とめぐり、甲から乙へ、
乙から丙へ移りゆき、つぎつぎに肉体に宿を求める。
動物のからだから人間の身体に移ることもあれば、
人間の身体から動物のからだに居をかえることもある。

(オウィディウス)¹⁾

ことあるたびに、習得したどんなささいな学識であってもひけらかしたがるウィル・ハニコームは、昨日、クラブで私に向ってつぎのように言うのでした。靈魂の輪廻については実にさまざまな主張があつて、東方の地では今日でもその教えを信じているのだとのことでした。サー・ポール・リコウが、鳥籠に閉じ込められている小鳥の自由を買い取り、それを大きな功德だと考えている数名の親切なイスラム教徒のことを書き記している²⁾、ちょうどそれはアルジェで囚われの身となっているわが同国人を身請けするのと同じことなのだ、とウィルは言います。これは彼らがあらゆる動物を変装した兄弟ないし姉妹だと考えており、たとえどんな卑しい境遇であっても、それに慈悲の手を差し伸べざるをえなくなるからなのだ、とウィルは言います。人間は死亡すると、靈魂が時を置かずして、生存中の自分の気質あるいは運命に似た他者の身体あるいは何らかの獣のからだに入り込むのだと彼らは言っているのだ、とウィルは言います。

私がこの博学の結末がどうなるのかと考えていますと、ウィルは一同に向って、酔狂なジャック・フリーラブが愛情をオウムやサルや狎に降り注いでいる婦人たちの一人に求婚したのだと言いました。彼はある朝彼女の家を訪問するときに、これについてとても素敵な手紙にしたためました。ウィルが言うには、ジャックは客間に通され、そこでしばらくの間、窓に鎖でつながれている彼女お気に入りのサルを相手にしたのです。そして、そばにペンとインクがあるのに気づいて、そのサルに扮して恋人宛につぎの手紙を書きました。いくら待っても彼女が降りてきませんので、その手紙を窓のところに残して、用事を済ますために帰って行きました。

この婦人はそのうちに客間に入って来て、サルが一心に紙切れを見ているのが分かり、

1) オウィディウス『変身物語』15.165-8

2) サー・ポール・リコウ『オスマン帝国の現状』(1688)

それを手にしました。今日に到るまで、それを書いたのがジャックなのかサルなのか分かっていないのだ、とウィルは言います。

前略

私にはお喋りの才がありませんので、貴女に私自身のことを理解していただく機会もなく長い間無為に過ごして来ましたが、ここにペンとインクと紙という便利なものがありますので、口頭では不可能な私の来歴を喜んで書き記すことにします。お嬢様、実は私は千年ほど前には、あなた方ヨーロッパのピタゴラスという哲学者がわが同胞から学んだといわれる神秘的な奥義で述べているインドのバラモンだったのです³⁾。私は神秘学の知識を駆使していつも会話を交わしている守護霊に取り入って来ましたので、守護霊は私の頼みごとは何でも聞き入れてやると約束してくれたのです。私の靈魂が獣のからだにだけは入り込まないように望みましたが、守護霊はそれは自分の力の及ばないことだと言いました。そこで私は、輪廻することになるならせめて記憶を忘れないで、私が私だと意識できる生き物に入り込ませて欲しいと頼みました。すると守護霊はそれなら自分にも可能であると言うや否や、望みを適えてあげると約束してくれました。それ以降、私は非の打ち所のない暮らしをしましたので、バラモン協会の会長に選任されました。そして私は死ぬまでその任務をととても誠実にこなしたのです。

死亡すると、私は別人の身体に移され、とても巧みにその役割を果たしましたので、ガンジス川一帯を統治する君主のもとで州知事を務めました。数年間とても誉れのある暮らしをしましたが、君主を豊かにさせるために人々を抑圧せざるを得ませんでしたので、次第にバラモンの純真さを無くしてしまいました。その結果、私は非常に憎むべき存在となり、主人は臣民への信頼を回復するために、ある日軍隊の先頭に立って主人に進言をしていた私の心臓に矢を放ったのです。

つぎに移されたのは森の中でした。私はジャッカル姿になり、ライオンに仕える身となりました。私はライオンの根城近くに陣取り、ライオンが目覚め獲物を追い掛ける時間となる真夜中に、吠えるのでした。ライオンはいつも私の後からついてきて、私が丸々とした牡鹿とか野生の山羊とか野うさぎとかを捕まえると、それを私から奪ってたらふく食べた後で、時折、私に骨を1本投げてくるのです。私としては鼓舞するために骨にしゃぶりつくしかないので。私が狩りを2、3回失敗しますと、ライオンは腹を立てていまいましように文句を言いますので、私はいたたまれなくなってしまうのです。

つぎの輪廻では、再度2本足で、インドの収税吏となりました。奢侈に流れ、金のかかる女と結婚しましたので、ひどい借金を抱えてしまい、人前に姿を見せる勇気が持たなくなりました。家を一步出るや否や、私を待ち構えている誰かに捕まるのでした。ある夜、宵闇にまぎれて思い切って外出したとき、私は逮捕され、そのまま牢送りとなり、その後数ヶ月で獄死したのでした。

3) ダシエール『ピタゴラス伝』(1707) 43-50頁。

その後、私の靈魂はトビウオのからだに入り、6年間というものとても物悲しい生活をしました。水中にいるときには捕食性の魚たちに追われ、水上に飛び立つと九分九厘鳥の群れに襲われるのでした。ある日、イギリスの船団の中を飛んでいたとき、巨大なカモメが口ばしをとぎながら、ちょうど私の真上を旋回しているのに気づきました。そのカモメから逃げ出すために水中にもぐったとき、巨大な鮫の口の中に入り込み、瞬く間に飲み込まれてしまいました。

とても驚いたのですが、その後数年すると、私はロンバード街の著名な銀行家になっていました。そして、以前お金で苦しんだことがあったことを思い出して、とても強欲で貪欲になりました。その結果、町の人たち誰もから恥知らずだとものしられることになりました。私は惨めで卑劣な老人と見られたのです。なぜなら、私はいわば骨と皮だけの状態で餓死したのですから。

その後、四苦八苦もし、驚きもしましたが、アリになってしまいました。こんなちっぽけな存在になることを心から心配しました。態度を改めなければ、いずれそのうちにダニになるのではないかと思います。そこで、私は与えられた仕事にとっても熱心に取り組みました。その結果、モグラ塚の中で一番勤勉なアリと見なされるようになりました。そしてついには、重荷を背負って苦しんでいるときに、以前わが共和国に大打撃を与えたことのある近所の不吉な雄スズメに捕らえられたのです。

それから私の境遇は少し好転し、ひと夏ハチの暮らしをしました。でもこれまで2回の輪廻での悲惨で貧しい生活にうんざりしましたので、それらの対極にある雄バチになりました。ある日、巣を略奪するために一団を率いたとき、私たちは巣を守っている群れから大歓迎されたのです。その結果、私たちの大半はその場で死に絶えたのでした。

その他もろもろの私が経験した輪廻について語ることができます。女たらしだった時のこと、その後10年間鹿毛の去勢馬として償いをした時のことなど。また、仕立屋やエビやシジュウカラだった時のことなど。シジュウカラのときは、クリスマス休暇のときに、是非とも新品の銃を試してみたいと考えている悪たれ小僧に仕留められたのです。

ところで、私がこういったさまざまな生き方について語っていますのは、6年間に渡って貴女に求婚している若い伊達男がいることを知ってもらいたいからなのです。お嬢様、その人物は貴女を獲得したいが一心得、仮面をつけ、踊り、歌い、あの手この手を使ったりしているのです。ついには、夜中に貴女の家窓の下でセレナーデを歌ったために風邪を引くありさまだったのです。私は貴女から冷たい仕打ちを受けている不運な若者だったのです。その不幸な若者から身を転じて間もなくして、私はエチオピアの山の上になりました。その地で、現在の怪奇な姿となり、イギリスの商館の召使に捕らえられ、グレート・ブリテンに送り込まれたのです。私が貴女の手に入った様子についてはお知らせする必要はありません。お嬢様、私が貴女に鎖につながれたのは初めてのことでないのです。とはいえ、囚われの身となっていますことをとても幸せに思っています。なぜなら、私が人間であったときに、そうしていたと思えるキスや愛撫を始終貴女から授かるのですから。私としましては、このように私の本性を明らかにしましたことが不利にならず、変わりな

く好意を寄せてくださることになって欲しいものと期待しています。

草々
パグより

追伸：狎を私に近づけないようにお願いします。狎は私の最大のライバルと考えていますので。機会があればそのうちに噛み付かれるかも知れません。

第344号 1712年4月4日（金曜日）

【スティール】

唯一の楽しみは食べることだ。(ユヴェナリス)¹⁾

拝啓

貴殿はこれまで人々が持っているささやか野望、あるいは、目立とうとするために人々が身につけるさまざまな風変わりな行状について触れていらっしやらないように思います。こういった行状ををよく観察しますと、下層生活の実態が見えてきます。私自身が大きな評判となっているのです。この評判を呼んだのは、(大層な出来事のように思えますが)ほんのちょっとしたことからだったのです。数日前、私は不運にもある紳士たちと同席しました。彼らは一度に食べる量によって人の評価をするのです²⁾。他の人たちと同様に、優位という考えによって目立ちたい一心の私は、今では仲間の賞賛を浴びるために節度を欠いた食べ方をしますので、その代償として命を投げ出すようなものです。私の不幸を上塗りするのは、生来胃が丈夫なことで、しばらく控えめにしますと、私の体が、まるで約束をしてかのように、大食い競争の準備が出来てしまうことなのです。私は仲間内の一人を除いて大食漢たちを瞬く間にことごとく打ち負かしていました。残った一人はその道の怪童といわれる人物でした。おまけにその間とても愉快そうに見ていた彼は、知らぬ間に私への敵愾心を燃やして挑戦してくるのです。これもまたあつと言う間に退け、私の完勝に終わったのです。争いが済んだ後でも、侮辱のつもりで、私は見物人たちがそれ以上必要でないと思うほどの量を食べるのです。しかしながら、この戦いの結果、私はもう二度と評判を得るための大食はしないことにしました。そして、この決意に従って、胃の頑丈さを当てにする三つの誓いを解決しました。これはわがクラブの条項に賭けるか支払うという項目を明記したので、実にうまく運びました。常識が備わっている人には分かりにくいことですが、この機会に、貴殿から私のことをねたましく思っている大食漢たちに教えてあげて欲しいのです。成功に汚名や死が伴わないように手遅れにならないうちに野心はほどほどにしておく方がいいのだということを。貴殿にお伝えするのを忘れましたが、ライバルにひきつけを起こさせんばかりに食べさせたとき、私は言葉には表せないほど喜んで、一同の拍手喝采を受け止めたのです。そのとき、私は評判になりたい、目立ちたい

1) ユヴェナリス『諷刺』11.11

2) 暴飲暴食に関しては、『タトラー』紙でさかんに触れられた。

という強い気持ちに駆り立てられたのですが、彼がほとんど飲み込むことが出来なくなるほど徹底的にやり込めて、彼の浮かれ騒ぎにお返しをしたのでした。皆が私の勝利にあれほど大騒ぎをしていなかったら、そこまではやっていなかったに違いありません。同様に、栄光への渴望によって、人々がしばしば息もつかずに大量の水を飲ませたり、その他もろもろの厄介な企てに駆り立てられたりするのは間違いのないところだと思います。もっとも、これを別のことに振り向けることができれば、大いにその人に利するに違いありませんが。実際、こういった私の野心は実に馬鹿げたことでした。人が大食で褒められるなんてことは貴殿にはお分かりいただけないと思いますが、こういった人は（すでに食事を済ませていても）すぐに食べだします。それはよく思う人物を褒めたり、注意を払ってではなくて公平に評価をしていなかった人たちを納得させたりすることと同じことなのです。

敬具

エピキュア・マモン³⁾

前略

お手紙を3, 4度差し上げたことがあります。ご婦人方、立派なご婦人方が最近はまだ入っているかぎタバコ⁴⁾を吸うという愚かな風習に関心を寄せていただきたいと思います。婦人によっては媚を売る雰囲気や落ち着いた男っぽい雰囲気が伴いますので、一概に不満を述べることは出来ません。だが、私から見ると、等しく不快なものです。ソーンター夫人はこれがなくては我慢できませんので、まるで食卓の塩のように常習となっています。彼女は常に安逸と無頓着を追い求めていますので、光栄にも彼女と食事を共にする人たちはかぎタバコをくわえ、ソースをつけている彼女の上唇を目にすることになります。可愛い彼女の姪も、伯母と同じように不快感を与えるように精一杯の努力をします。姪御さんは見た目にはさほど不快ではないにしても、この上なく耳障りな存在で、かぎタバコを差し出されると、鼻を不快に鳴らし、指先を鼻孔に持っていきながら、自信たっぷりに喋ります。おそらくこれはご婦人方がお喋りをするときにはあまり上品な姿ではないことは確かです。ところで、不快のもとはどこにあるのでしょうか。その原因は、無作法なことをする人にあるのでしょうか、それともそれを見せられる人にあるのでしょうか。私自身は、常々、口元にぶらさがっているこの不快な物体に嫌悪感を抱いていますので、どんなに愛想のよい会話あるいは人物であっても、この埋め合わせをすることは出来ないのです。ただ単に心地よさを求めるためとか会話の合間にかぎタバコを吸う人々に関しては、私は我慢できます。だがその時でも、敬意を払って耳を傾けるべき人物が喋っているときには吸うべきではありませんし、ましてや、かぎタバコ入れを回しあったりすることを許すべきではありません。ところが、フラヴィアはこれに夢中になっていますので、説教の最中に（確かに上等のブラジル・タバコ⁵⁾が詰まっているのですが）タバコ入れを取り出

3) エピキュア・マモンは、ベン・ジョンソン『錬金術師』の登場人物。これは最近では、2月19日に、ドゥルーリー・レイン劇場で上演された。

4) かぎタバコについては、第73号参照。

5) チャールズ・リリーは、『英国の香料商、かぎタバコ製造業者、塗料商ガイド』（1822）で、最高級

します。そして、厚かましくも自らの育ちのよさを見せるために、近くに座っている女性だけでなく男性にまでそれを差し出すのです。今では彼女の手の綺麗なことは誰もが知っていますので、私としましては、彼女がこれ以上尽力なさないことを希望します。1週間前の日曜日、献金ということになったとき、彼女は上機嫌でお金を出しました。が同時に、彼女は教区委員に一服如何ですかと言ったのです。何卒こういったことに貴殿のご意見をお聞かせください。

草々

品はブラジル製と述べている。